E 12　主婦における生活行動の構造 —— 備前焼作家の妻について

お茶の水女大家政　時岡晴美

目的　生活を構造的に把握するひとつの試みとして、生活行動を構造的にとらえようとした。生活行動にはあらゆるパターンがあり、各々が関連しつつバランスをとりながら展開されており、そこに何らかの法則性が存在すると想像される。そこで、本研究では客観的に把握しうる生活行動に着目し、時間、空間、行動内容の3面から法則性を探った。

方法　岡山県備前市伊部在住の備前焼作家の妻を対象とした。備前焼は我国六古窯のうちでも最古のものであり、1,000年間伝統的に焼き続けられている。現在約200名の備前焼作家のほとんどが備前市伊部に在住、築窯している。その妻11名に対し、直接観察法で生活行動調査を実施した。1行動終3時記録法を用い、時間を分単位、空間を室単位、行動内容を具体的に記入した。調査期間は1980年2月29日から9月19日までで、午前9時から午後5時30分までを原則として、対象者1人に対し連続8日間行なった。

結果　素元の主婦は外出時間が短く、作家で特に核家族の場合は長い。主婦は家事労働を中心に働いており、家事労働は毎日行なわれるが時間数は少ない。毎日在室する場所は在室総分数も長く、台所と居室には全員が毎日在室する。生活空間の使用パターンに、分担された仕事による特徴がみられる。連続する2行動の時間をみると、15分間と20分間では明確な差異がある。個人の行動の変動パターンは、空間主軸型、行動内容主軸型、主軸分散型に分類できる。等々、生活行動の周期性は認められなかったが、生活行動のいくつかの規則性を把握することができた。従って、生活行動の面から、その構造性を把握しうることを示唆していると考えられる。